

荻野美穂 (著)

『「家族計画」への道—近代日本の生殖をめぐる政治—』

岩波書店, 2008年, 351ページ

荻野美穂さんの1994年の著作『生殖の政治学：フェミニズムとバース・コントロール』を手にしたとき、こういうテーマについて研究をしている人が日本にもいることを知って驚嘆した。それはバースコントロール運動の創始者として有名な米国のマーガレット・サンガーと英国のマリー・ストーブスを描いた研究書であるが、家族計画関係者の中ではとかく神聖視されがちなサンガーについて批判的視点も交えて余すところなく書かれていることがとても新鮮に感じられ、それ以来荻野さんは評者の畏敬するところとなった。2002~2004年度に本研究所の人口問題研究プロジェクト（出生力に関連する諸政策が出生調節行動を介して出生力に及ぼす影響に関する研究）の所外メンバーになっていたが、親しく接する機会を得たことはありがたいことであった。

さて本書は、近現代日本の避妊と人工妊娠中絶を主とした出生調節（著者の言葉では「生殖コントロール」）の歴史をまとめた研究書である。扱っている時代と題材は、避妊が「罪悪」視されつつも新マルサス主義の考えが入ってきた明治期（第1章）、サンガーの来日（1922年）をきっかけに日本でも産児調節運動が盛り上がり、なおかつ「墮胎」の問題に関心の高まった大正から昭和の戦前期（第2章、第3章）、「産めよ殖やせよ」の戦争期（第4章）、戦後の優生保護法の制定（第5章）、「家族計画」が普及した1950~60年代（第6章）、そして1970年前後と1980年代はじめの二度にわたる優生保護法改定の動き（第7章）であり、およそ百年に及んでいる。とはいえ、中心をなすのは産児調節運動、優生保護法、家族計画の3つであり、時代の範囲としては、1920年頃から1960年代まで約40~50年にわたる。本書の題名からいえば、家族計画が日本に定着したといえる1960年代が物語の終末のはずだが、最後の章が追加されねばならなかったのは、本書でたびたび指摘されているように、わが国で避妊と中絶が切っても切れない密接な関係を有しているからである。

本書の研究方法は、主に文献・資料の読解と関係者の聞き取りである。収集・参照された資料は膨大なものであり、その内容は、国家の立法や政策、学術・文芸や時代思想、マスコミの論調から男女個人の意識と行動、具体的な技術（避妊法など）に関することまで多方面にわたる。様々なプレーヤー（政治家、官僚、学者、活動家、宗教団体、労働者、農民、主婦）の思惑や利害が衝突と均衡を繰り返す過程がつぶさに描かれるが、それはまさに性と生殖をめぐる政治絵巻である。とりわけ本書でGHQ文書の検索などを通して、戦後の日本が人口増強策から人口抑制策へと舵を切るのにアメリカの強い関与があったことを裏付けたことは、特に注目すべき貢献の一つといえよう。

人口学の観点から見れば、本書が扱った時代は、ちょうど日本が多産多死から少産少死への「人口転換」を遂げた時期にあたる。人口転換は、理論的に言うと、まず死亡率が下がるがまだ出生率は下がらず人口が急速に増える前期と、出生率が下がり人口増加が収束に向かう後期からなる。この後期は、それまで女性一人当たり4~5人あるいはそれ以上の高い出生力にあったのが、女性一人当たり約2人の子どもという人口置換水準の出生力へと落ち着く「出生力転換」の時代でもある。本書の中心部分はまさにこの出生力転換の時期と一致する。その意味で、本書は人口学の本として書かれたわけではないにもかかわらず、マクロの人口研究とちょうど補完関係にある。それゆえ、人口、ジェンダー、セクシュアリティなどの視点から現代日本の成り立ちを理解したいと考える人にとって本書は必読書といえる。

それにしても、日本がかくも短い期間に出生力転換を成し遂げたことは、国民的「偉業」といって

いいと思う。それは、不安定な活火山が大噴火によりエネルギーを放出して休火山に変身したようなものである。もしこの転換がなければ、1970年代以降の日本が「世界第2の経済大国」とか「一億総中流」と称せられる繁栄を手にする事はなかったであろう。そのような大事業が国家による強制やあからさまな干渉なしに実現したことは、幸運にして幸福なことであった。著者は、家族計画指導の現場で活躍した助産婦や保健婦、理論面でバックアップした「厚生省やその周辺の若手の官僚や人口学者」（旧人口問題研究所や旧国立公衆衛生院の職員にとっては先輩や恩師にあたる方々であり、本書によってあらためて歴史を身近に感じることができる）に暖かい目を向けている。紆余曲折はありながらも、戦後の日本で人道主義に基づいたリベラルな思潮が近代的合理主義や、大衆の生活改善の期待と子どもの教育にける熱意、夫婦の性生活向上の意欲などと結びついて「家族計画」を支持する世論が形成されたのは幸いであった。

おわりに、書評としては無理にでも何か難を言わないといけないのだが、一つあげつらうとすれば、本書が世に出た時期である。実は、古屋芳雄（1974年没）、太田典礼（1985年没）、國井長次郎（1996年没）、篠崎信男（1998年没）、加藤シツエ（2001年没）など、戦後の運動の中心人物は、比較的最近まで存命であった。それゆえ、もし本書が20年ほど早く書かれていたら、当事者へのインタビューが資料の大きな比重を占めることになったかもしれない。もちろん、これはとんでもない空想である。またそのような空想が浮かぶほど、本書はこのテーマの書物として決定版といえる存在なのである。

しかし、歴史研究の方法論上の問題は別にして、本書が作られた時期にも別の意義があると思われる。米国で始まった「女性の健康」運動など、身体に関心を抱くフェミニズムの新しい波が1994年のカイロ会議でリプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康／権利）という理念を国際社会にアピールし、その2年後、優生保護法という法律の少なくとも「優生」という文字を葬り去った。そのような新たな地平から「生殖コントロール」を中心とした日本の性と生殖をめぐる思想と運動の過去一世紀にも及ぶ歴史を振り返ったことは一つの時代的意義を持つものといえよう。

このことを著者はあえて述べていないが、それは本書が歴史書であり、史料を以て語らしめるという姿勢を堅持したゆえであろう。評者はそのような姿勢に共感を覚えるとともに、読者が本書の一節一節に登場する人物の言動をなるべく当時の置かれた状況に即して理解しようと努めることを願うものである。

（佐藤龍三郎）